

【22】 深浦澗口観音由来建立記

写1枚

〔書名よみ〕ふかうらまぐちかんのんゆらいこんりゆうき

〔編著者〕未詳 〔写刊年次〕未詳

〔内題〕深浦澗口観音由来建立記

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕小破 〔装訂〕一枚物 〔丁数〕一紙

〔本文用字〕漢字 〔法量〕縦一五・七×横四三・六糎（開いて、縦

三一・六糎） 〔料紙〕楮紙 〔書入〕ナシ 〔印記〕ナシ

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

本書は、深浦澗口観音由来建立記という名の通り、円覚寺本尊の観音像の由来と、その後、津軽歴代藩主との関わりについて、特に棟札などの証拠が残る事柄について書き上げたものである。

まず初めは創建からはじまる。本尊十一面観世音菩薩は、聖徳太子の御作である。御堂は、田村將軍の草創で大同二丁亥年（八〇七）に建立した。その後、時代は一気に飛んで、中世へ。さらに記事を追ってみよう。

永正三年（一五〇六）木庭袋伊予守頼清が御堂を御修葺、御棟札を所持仕り候ふ、とある。「伊予守頼清」とは、葛西頼清のことである。葛西氏は、もともと武蔵葛西地域にいた葛西氏で、後醍醐天皇の二度にわたる倒幕計画において活躍する。葛西氏の六代目当主の葛西清貞は、建武二年（一三三五）のものとみられる「後醍醐天皇宸筆事書案」で、奥州における清貞の活躍によって、後醍醐天皇より「無二の之忠」と賞さ

れた。この清貞の頃に葛西清重以来の本拠地である葛西地域を退去し、陸奥国へ本拠を移したと考えられている。葛西氏は、陸奥国へ移った後、日本海側へも展開している。天文二年（一五三三）大光寺城主の葛西頼清は、南部に攻められて、深浦館へ逃れ、深浦では木庭袋頼清と名乗った。この頼清が、観音堂の修理をしたのである。その後、御本尊の御台座は、後光破様にてこれ無し、とある。円覚寺は、永正三年（一五〇六）の棟札に「葛西木庭袋伊予守頼清」とみえる、とのことである。

次に、寛永元年（一六二四）に移る。弘前藩二代藩主信牧公様（一五八六から一六三一）は、右御本尊を御彩色并後光・御台座を新たに作り、寄付なされた。しかし御堂が手狭に付き、仏を入れることが難しくなり、寛永二年（一六二五）に新たに三間四面に御堂を御建立なされた。

その後明暦元年（一六五五）、三代信義公様（一六一九〜一六五五）は、御堂と御葺替、御修葺をなされた。

寛文七年（一六六七）に、四代信政公様（一六四六〜一七一〇）は、御本尊御彩色に加えて、仏像に箔を張り、手入れをなされた。その後、御堂が大破したため、元禄二年（一六八九）に、しばらくの仮置きのために御仮殿を建立した。元禄十三年（一七〇〇）には、信政公様は、御堂を新たに建立し、再建なされた。元禄一四（一七〇一）年四月一八日には御堂御普請が出来上がり、仏像を入れ、遷座することができた。その時の棟札がある。

その後、享保十三年（一七二八）に、信寿公様（一六六九〜一七四六）が、御堂の御葺替をなされ、その棟札がある。

以上、棟札などの記録が追えるところについて、御本尊とその御堂の歴史をたどったものである。「屋形様御参詣」とあるように、歴代藩主の信仰をも集めた円覚寺の歴史を物語る資料である。短く簡略ながら、貴重な資料といえよう。

（渡辺 麻里子）

信政公樣在汴中汴彩苑
汴佛汴入遊之後
汴堂及火破元派二年

信義公樣在汴中汴智
信懷法 汴付之後
寬文七年

明曆元年
之遊其後
新之間也汴堂汴建

汴佛教於寬永三年
寄附之遊汴堂中授付
後先汴覺寺新汴汴
信收公樣在汴中汴彩苑

寬永元年
破換之廿
汴中中之汴覺寺這先

汴佛壇汴棟札不持法之
汴庭袋伊豫寺賴善堂
汴堂建之其這永三年

貞享元年
聖德太子汴田村將軍
中之十面綴世首其甚勝

信源十三年十月九日
汴浦汴仁觀音由來
建三記

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建

信源十三年十月九日
信政公樣在汴中汴建